

電車通学の恩送り

小学6年 篠原 陽莉

私は、小学1年生から電車通学をしています。片道50分。おそらく、学年で一番遠くから通っています。途中までは友達がありますが、最後は1人。その1人の時間も、今は、本を読んだり、考え事をしたり、大事な時間です。疲れて眠ってしまっても、最寄り駅に着くとちゃんと目が覚めます。

けれど、電車通学を始めたころは大変でした。乗り換えを間違えないか、降り忘れないか心配で、友達と別れた後はいつも緊張していました。母が、降車駅を書いてくれた小さな紙は、毎日握りしめてボロボロでした。そんな私を見て、多くの人が助けてくれました。ぐっすり寝て乗り過ごしてしまった私を逆のホームまで連れて行き電車に乗るまで見守ってくれた高校生、いつも「おはよう」とあいさつしてくれたおじさん、途中でおなかが痛くなった私をトイレまで連れて行ってくれたおばさんもいました。いま自分が6年生になり、1年生が小さな体で大きなランドセルを背負って電車通学するのを見ると、「私もあんなふうだったのかな。小さいのにえらいな。」と思います。

毎日、祖母が駅に迎えに来てくれるのですが、電車通学中に色々な人にお世話になった話をすると、祖母はいつも

「ありがたいねえ。このご恩は、ひまりが大きくなったら、電車で困っている人にお返しするんだよ。」

と私に言います。「恩送り」というそうです。

私は祖母の言葉を忘れず、電車で困っている人を見かけたら勇気を出して、「お手伝いしましょうか」と声をかけるようにしています。電車通学に慣れない1年生がいたら、心の中で「がんばれ！」と応援しながら、そっと見守ります。これが私の「恩送り」です。